熊野古道 みちくさ記 10

大阪最後の宿場町へ

絵と文・熱田親憲　題字・熱田秦華

祈り、交易、戦い、交流の道

山中宿（阪南市山中渓）にて

JR阪和線長滝駅（泉佐野市）を下車し、国道26号沿いに熊野街道を山中渓駅（阪南市）まで散策した。

まず府道248号沿いの蟻通神社（泉佐野市）に参拝。村の産土神社らしい構えだ。長滝西交差点を左折して狭い熊野街道を進むと奥家（旧庄屋）住宅に出合う。奥家は和泉国の有力な国人で江戸時代には樫井の庄屋（農民）を代々務めたという。住宅は江戸時代の建造。どっしりした造りで国の重要文化財だ。近くには塙団右衛門直之と淡輪六郎兵衛重政の墓がある。2人とも1615年の大坂の陣で豊臣方の武将として、徳川方の和歌山城主・浅野長晟の軍と樫井川で交戦。先陣争いをして討ち死にした。それでも武名は高く、戦の地で弔われ、古道のここに眠っている。この合戦は豊臣方の敗北となった。戦功を焦ったことが敗因と言われているが、紀州・山口一族のお菊による密書もれの伝説などもあり、諸説尽きない。

明治大橋（泉佐野市）の麓に古戦場の記念碑があるが、なぜかもの悲しい。府道64号を南下して、海会寺跡・一岡神社で一服した後、和泉砂川駅近くの信達市場（泉南市）に着く。熊野詣でがにぎわった中世は、上皇の宿泊所だった。元禄時代（1688～1704年）以降は、紀州の殿様の参勤交代の本陣が置かれて人が集まり、市が立ち始めた。商売繁盛を願って、本陣跡近くには市場稲荷神社が建つ。毎年年末になると、数丁にわたって歳の市が開かれ、泉南市の礎となったようだ。熊野街道は大阪商人を呼び寄せた交易街道でもあった。

ここから一気に大阪最後の宿場、山中宿の中宿は山中川の渓流地にあって、和泉と紀州を結ぶ古道が通っており、古くは南海道と呼ばれ、神武天皇の御東征の道であった。平安から鎌倉時代には熊野詣での客でにぎわい、川沿いに宿が建ち始めた。江戸時代の紀州徳川藩参勤交代時には、旅籠も本陣を含めて二十数軒あり、近隣より、3000人の人夫や助人が集まるほどのにぎわいだった」とある。

大名行列は動く「市場」なのだ。駅裏に流れる山中川は桜の名所で、春は大勢の花見客が訪れる。山中渓駅から約1キロ離れた県境に、山中川に架かる境橋がある。「1857年土佐藩士広井大六が同藩士と口論の末、切り捨てられた。子供の岩之助は仇討ちの免許状を持って、仇のいる紀州藩に国払いしてもらい、境橋の泉州側で待ち受けて、見事仇討ちを果たした」と、日本で許された最後の仇討の場として説明されていたが、紀州藩にとっては、藩境は「捨て場」なのである。今日歩いた「道」には国づくりのための道、祈りの道、隣接藩との交易、戦いの道、暮らしの道、社交・交流の場、口承伝達などの役目があることを学んだ。

（次回は9月26日掲載予定）